

日本海に浮かぶ小さな島





粟島浦村の概要

●位置と地勢

村上市の北西約35kmに位置し、岩船港から「高速双胴船awalineきらら」で約55分、「普通船フェリーニューあわしま」で約90分の距離にある。

島の周囲は23.1kmの孤立小型離島で有り、地形は標高265mの小柴山をはじめ島の南北に山並みが走り、平地に乏しい。

●面 積

畑 0.70km² 宅地 0.08km² 山林 7.81km² その他 1.19km²



人口、世带数、高齡化率





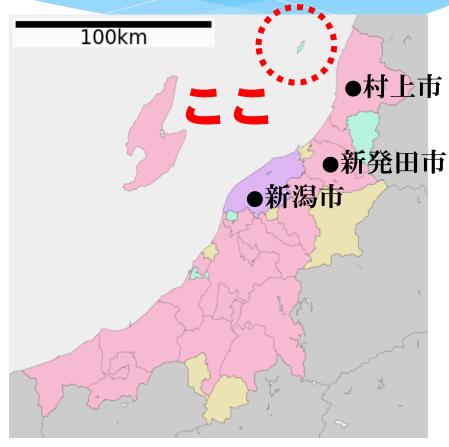
(令和2年6月現在)

- •一島一村の自治体
- •人口 346人、168世帯
- •平均年齡 56.05歳
- •高齡化率 45.4%
- •主產業 漁業、観光業
- ・無医村(テレビ診療を実施)
- ・高校はない(村上市に寄宿舎)



粟島の位置







フェリーと高速船による粟島航路

●航路(粟島~村上市岩船港)

船名	船体	トン数	定員(人)	速力(ノット)
ニュー あわしま(フ)	鋼	654.0	400	29.6
きらら(高)	アルミ合金	184.0	170	42.6



3. 主産業

○漁業は、鯛・ブリ・真鱈の好漁場を有しているが、年々魚価が低下し、燃料 高騰により漁家経済に負の影響を及ぼしている。今後は生産物の付加価値 を高め、「魅力ある漁業」の環境づくり推進して後継者育成に努める。

- ※藻場造成事業
- ※特産品販売所の建設

○観光は、平成4年に5万7千人の入り込みがあったのを現在2万人ピークに、年々下降状態となっている。今後は、戦略的な観光計画と行動が必要。



無医村粟島を支えるテレビ遠隔診療

- ●村営の診療所が1カ所あるが、常駐医師は60年近く不 在である。看護師は、3名体制となっている。
- ●平成12年12月からTV診療を行なっている。週2回のペースで診察を行なっている。(診察はできるが診療はできない。)
- ●歯科診療は、平成5年から毎年3~11月の毎週金曜日に新潟大学病院の歯科医師が粟島に来て診療を行なっている。
- ●救急医療体制派、一次的にTV診療で村上病院の医師が所見し、通常は定期船で搬送するが、航行できない場合は、県や自衛隊のヘリコプターを要請している。



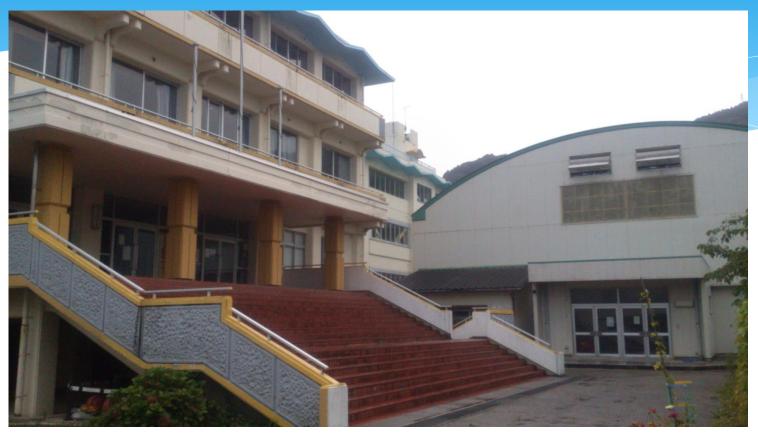
無医村粟島を支えるテレビ遠隔診療







歴史ある粟島浦小中学校



島で唯一の学校「粟島浦村小中学校」(明治25年創立) 現在、小学生12名、中学生19名の生徒が通っている。 高校はないため、中学卒業後は親元を離れ本土へ渡る。



平成25年度より離島留学「粟島しおかぜ留学」









粟島しおかぜ留学の特色

「人が育つ島づくり」

地域の教育力、教育資源を生かす

- * 自然の中で過ごし地域住民と交流
- * 馬とのふれあいによる「命の教育」
- *極小規模校でのマンツーマン指導



「島そして日本の将来を担う人材の育成」



留学制度が始まる前は

平成30年度には、 島の子どもが(中学生)2名に 平成23~24年度

このままでは同級生もいない学校生活に。。。

入学式や卒業式も 開催されない学校に。。。



学校と村の連携

- *保護者への説明
 受け入れ側保護者の不安の解消
 - 島の子にとっても有益とする工夫
- *学校活性化の好機
 - 職員の共通理解と意欲付け
- *特色ある教育を村が全面的に支援極小規模、小中一体、地域密着



留学制度創設について

校長による先進地研究

教頭による学校 での受け入れ 準備

管理担当者(NPO 法人)の 熱意

留学制度の 具体的な準 備が進行 役場担当者の意欲



そうだ!留学制度を始めよう!

馬の牧場を整備し て、子どもたちへの プログラムに

人員を配置して 留学制度の管理 が出来るように

寄宿舎を整備して留学生の寮生活を可能に



粟島しおかぜ留学制度 の創設(平成25年度)



留学制度開始1年目

管理人の超 長時間労働

管理人と周囲の関係者 とのコミュニケーション 不足 学校関係者や寮管理人、 役場担当者の熱意で、 6名の留学生から始まった 「しおかぜ留学」

> 島の保護者や役場 職員の理解不足



地域をあげて受け入れ体制準備

留学支援連絡会議



PTA·関係者会議





留学制度開始2年目(1)

村の直営として運営することに

学校関係者や寮管理人、 役場担当者の尽力で継続 し、9名に増えた留学生。



校長・教頭・管理人・役 場担当者たちの尽力。



オリエンテーションや保護者同士の顔合わせ、保護者会なども始まり、留学制度が形作られた。



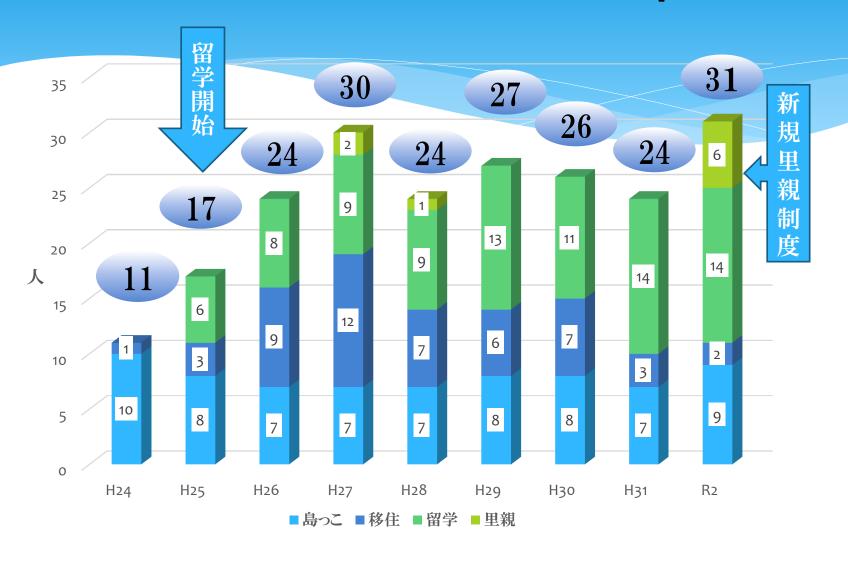
留学制度開始3年目以降

*〇地方創生戦略の「学び」の産業化プロジェクトの核として位置している。

地域コミュニティの核として存在



児童生徒数の推移(H24~R2)





児童生徒・職員数

*全校児童生徒数 31名(4月1日現在)

小学校 12名 複式3学級(1·2年、3·4年、5·6年)

中学校 19名 单式2学級(1年、2年、3年)

*職員数 16名

小学校 教頭1、教諭3

中学校 教頭1、教諭16、講師1

校長、養護教諭、事務員、用務員

庭務員

粟島しおかぜ留学実施にかかわる組織



留学生の生活場所



〇留学先としての独自性



牧場での乗馬体験

様々な体験メニュー



「命の教育」教育を実践する場



あわしま牧場

粟島には、古くに野生の馬がいたといわれている。牧場を整備し、馬のいる風景を取り戻しつつある。





馬の世話や馬との生活を通じ、 命のつながりを 学ぶ、特色ある 教育に取り組ん でいる。



寮での共同生活

食事の手伝い

余暇は自由に過ごす







馬とのふれあい

食事等の世話

馬術大会にも出場







週末の地域での体験活動

畑での収穫作業

食堂・民宿の手伝い







地域の人との日常的な交流

温泉施設でのふれあい

関係者と懇親会







学校存続は地域のコミュニティ維持に不可欠

- *児童生徒、職員の地域行事へ参加
- *地域住民が学校行事へ参加
- * 学校は地域の伝統文化の継承、交流の拠点



留学事業が地域活性化に結びつく



実績と今後に向けて

島の子、保護者、地域住民の声

- *留学生の話で島の良さを再確認できた。
- *いろいろな考えを聞けることがうれしい。
- *(保)同級生ができたことにより、刺激を受けて向上心が出てきた。
- *(地)学校と地域との交流が盛んになり、地域を元気づけている。
- *(地)子どもの数が増えて、活気が出た。



留学生と保護者の声

- *人と積極的に話ができるようになった。
- *勉強が分かるようになった。
- *今までとは違う自分を発見した。
- *地域の人みんなが声をかけてくれる。
- *(保)夏休みに帰省した際に、成長を感じた。少しずつ自立してきている。
- *(保)全力で頑張る姿に驚き、感動した。

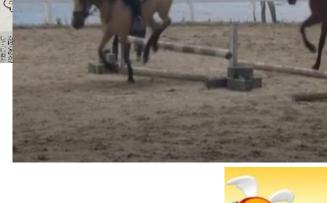
地元新聞、テレビでたびたび話題に



NHK 新潟日報モブ



隣に同級生「うれしい」









成果として見えてきた点 学校と島の活性化「人材育成と島づくり」

- *児童生徒数が増えたことで、競争心が芽生えるなど、教育活動の充実が図れた。
- *地域住民の学校への関心が高まり、地域での活動や交流が一段と盛んになった。
- *留学に関する報道を中心として島外からの注目が集まり、島全体が活気づいた。



今後の課題

- *中・長期的な視点で、地域の理解と協力を得ながら制度を運営する組織の確立
- *個々の児童生徒の二一ズに対応できるような地域における支援体制の整備

村と学校一体の事業強化が必要!



粟島の地方創生は、2040年人口300人を維持すること

粟島創生〜島民の願い〜

独自文化・歴史を持つ「粟島」の継承・存続~誇りの持てる豊かな暮らしの実現・再感~

中期目標:人口300人の維持

【稼げる生業の創出】

- ~漁業・民宿業に並ぶ第3の柱を~
- ~5名を雇用できる民間法人の確立~
 - ~既存産業・島民への経済的効果~
 - ⇒1億円規模の産業創出へ

【社会に必要とされる要素】

- ~"残したい"と思われる島に~
- ~財政力指数0.08の現実~
- ~離島だからできる社会貢献の確立~
 - ⇒粟島の社会貢献の"みえる化"



"育つ粟島"

~離島だから提供できる「学び」の産業化プロジェクト~

"育つ粟島"事業

島の資源を生かして、「学ぶ」を産業として成立させるプロジェクト

漁業

「粟島版」家内6次産業

民宿

粟島のアイデンティティ

水揚: 2億円/年程度

正組合員:約50名(全員50歳代以上)

粟島定置での 若者雇用

"自然体験プログラム" 命の教育" は島の子も対象 ~約半世紀前に確立したモデルの漸減~



学びき

近年の稼ぎの大黒柱

売上: 2億円/年程度

ピーク時:70軒(現状33軒)

ゲストハウスの 開業

あわしま自然体験学校

- ・自然体験プログラム・商品化※雇用創造
- ・教育・研修旅行の誘致

自然・資源・歴史の学び

自然体験 プログラムの提供 (通年)

(通年)

しおかぜ留学

- ・しおかぜ寮(集団生活体験) ※雇用創造
- ・里親制度導入~フル・週末~

異文化(生活・人)の学び

プログラムや資源管理で連携

"生きる・活かす" 学び・体験

粟島牧場(ホースパーク)

- ・共生社会・文化の構築
- ・命の教育を軸とした社会教育 プログラムの構築

命(共生・世話)の学び

"命の教育"等 社会教育プログラムの提供 (通年)

広義の"観光"



しおかぜ留学の課題と「育つ粟島」事業のねらいについて

【課題1】寄宿舎方式での生活

- ・人間関係の固定化による息詰まり感 ⇒"息抜き・変化の必要性"
- ・寄宿舎に閉じることによる島民との"距離感"
 - ⇒島民との交流、島の生活体験の不足
- ⇒島民も交わる機会を探している、逸している。



今後の方向性

・寄宿舎+週末里親制度の導入 ⇒初年度の週末里親制度を 契機に2年目は完全里親 制度へ進む道筋を創る。

【課題2】自然・文化体験プログラム

- ・島のことを十分に知らない留学生
- ⇒海も山へ入るきっかけがない。寮と学校の往復
- ⇒留学事業だけでプログラムの事業化は困難
- ・プログラム化の前段として歴史・文化資料が不足
- ⇒過去の大火による文献の消失
- ⇒プログラムを見据えた情報の収集が必要



今後の方向性

- ・教育・観光を連動させた事業化 ⇒あわしま自然体験学校の設立
 - ⇒教育旅行の受け入れに向けた 村上・岩船地域での連携

【課題3】教育プログラム

- ・留学事業の売りである"命の教育"は内容途上 ⇒牧場利用の競技性への傾注
- ⇒教育・観光の両面での社会教育プログラム構築
- ・留学の継続を断念する理由として「学力」の不安
- ⇒島の暮らしに満足しても、本丸の「学業」も重要
- ⇒現状では塾や家庭教師もなく、自主学習メイン



今後の方向性

- ・牧場を軸とした命の教育(社会教育プログラム)の再構築
- ・放課後ネット塾"あわしま塾"開講



あわしま自然体験学校 事業の枠組み

村役場

総合政策室

- ・3年を目処に自立経営組織へ
- ・島民(登録者)に利益を還元する仕組み
- 事業統括

- ·事業管理
- ·各種調整·支援

自然体験サポーター (島民登録者)

民宿経営 (島民登録者)

漁師 (鳥民登録者)

農家 (島民登録者)

- ・自身の特技、本業との兼ね合いでできる内容・時期を登録
- ・コーディネーターと調整し、体験プログラムの一部を担う。
- ・研修の受講を必須として一定の品質は担保する。

自然体験学校 代表

プログラムの 実施・協力

照会・依頼 人件費支払い 自然体験リーダー (常勤職員)

自然体験リーダー (常勤職員) 自然体験リーダー (常勤職員)

自然体験リーダー 引き続き公募中!!

- ・事業の運営・管理・顧客対応
- ・プログラムの企画・運営
 - ⇒自然体験リーダー(登録者)と調整

調整支援

自然体験コーディネーター (非常勤職員)

- ・自然体験リーダーと島民の橋渡し・側面支援
- ・自然体験プログラムの掘り起こし

あわしま自然体験学校

40



粟島の名物



わっぱ煮



タイボーくん

